

【ノート】

## 東海・北陸地区国立大学—入試広報の取組 ⑤

—連合としての合同説明会の有効性についての検討—

高木 繁（名古屋工業大学），寺下 榮（静岡大学），村松 毅（静岡大学）

合同説明会でのアンケート（5年分）の自由記述の分析から，合同説明会の評価を行った。また，名古屋工業大学の志願者の分析から，必ずしも輪切りの世界ではなく，学科の学びをわかりやすく伝えてきた効果が出ていることを確認した。静岡大学の出願・資料請求状況から各地域に応じた入試広報の必要性が示された。最後に，国立12大学ホームページによる入試広報の状況を紹介する。

### 1 国立12大学入試広報連絡会

国立大学は，昨今の不況の影響で安定した人気を保っているが，私立大学に比べると広報予算が圧倒的に少ないため，1大学のみでの広報では限界がある。国立12大学はエリア内で連合して護送船団方式で広報を行うことが最善であると考え，独自に企画した様々な合同説明会を展開してきた。表1に国立12大学の構成を示す。

表1 国立12大学の構成

「国立12大学入試広報連絡会」  
（2005より）愛知教育，金沢，岐阜，静岡，豊橋技術科学，名古屋，名古屋工業，浜松医科，三重  
（2006より参加）金沢，富山，福井  
（2009より参加）信州

過去5年間の活動は以下の通りである。

#### 【2005年度】

10/16 合同説明会 河合塾千種校

#### 【2006年度】

10/01 合同説明会 河合塾千種校

#### 【2007年度】

10/14 合同説明会 河合塾千種校

11/18 合同説明会 金沢

12/15 願書配布会 河合塾名古屋校

#### 【2008年度】

09/28 合同説明会 河合塾千種校

10/04 合同説明会 金沢

10/05 合同説明会 松本

11/29 願書配布会 河合塾名古屋校

#### 【2009年度】

09/27 合同説明会 河合塾千種校

10/04 合同説明会 金沢

10/18 合同説明会 松本

11/15 合同説明会 神戸

11/29 願書配布会 河合塾名古屋校

### 2 各イベントの状況

各年度のイベントの中では，秋の河合塾千種校での合同説明会と年末の河合塾名古屋校での願書配布会が最も規模が大きく，広報にも力を入れているものである。名古屋以外での合同説明会の参加者は，最大でも100名程度であり，成功しているかどうかの判断は難しい。まず，河合塾千種校での説明会の状況について検討する。図1に河合塾千種校での合同説明会の参加者数の推移を示す。2007年，2008年と減少していたが，2009年は持ち直した。要因としては，不況による国公立志向の強まりが最も大きいと考えられるが，信州大学の参加により新規性が生じたという点も大きく寄与しているであろう。

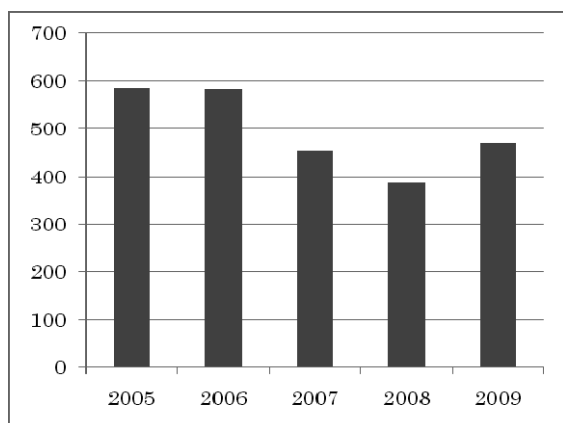


図1 合同説明会（名古屋）の参加者数

### 3 アンケート結果からの検討

2005年から2009年の5年間の合同説明会のアンケートの自由記述欄 244 件分の分析を SPSS Text Analysis for Surveys を用いて行った。表2に抽出結果を示す。

表2 アンケート結果カテゴリー別

カテゴリー	キーワード	個数	小計
良い	良い・感謝	29	128
	良い・良い	61	
	良い・うれしい	8	
	良い・賞賛	7	
	良い・満足	7	
	良い・その他	6	
	参考になりました	10	
悪い	悪い・不満	17	34
	悪い・残念	8	
	悪い・悪い	1	
	悪い・その他	5	
要望	その他・要望	38	49
	その他・お願い	5	
	その他・提案	3	
	その他・疑問	3	
がんばる	がんばる：合格	45	45

カテゴリーとしては「良い」「悪い」「要望」「がんばる」に整理した。各カテゴリー内では重複した回答が入らないようにした。

ただし、いくつかの文が含まれる回答で、明らかに内容が違う場合には、重複を許してカウントした。カテゴリーの「悪い」と「要望」では、明確な要望項目が書かれている場合には「悪い」で一度抽出した回答も「要望」で再抽出した。

全体としては「良い」というカテゴリーの回答が多い。明確な理由が記載されていないものが大部分を占めていたが、明確に理由を書いている回答もあった。「いくつかの大学が参加しているため比較できた」が16件で最も多かった。また、「学科に対する勘違いが解消された」が7件あった。この合同説明会の最大の目的である「不本意入学を防ぐために学部や学科のことをよく理解してもらう」ということが成功した結果だと考えている。

カテゴリー「悪い」、「要望」には合同説明会の抱える問題が反映されていると考えて、その内容の分析を行った。その結果を、表3にまとめる。

表3 悪い・要望の分析

カテゴリー	キーワード	個数
悪い, 要望	他大学の参加	12
	講演時間が短い	9
	他地区での開催	9
	資料がなかった・少ない	7
	会場が狭い	5
	基調講演の資料が欲しい	4
	願書の配布	4
時期・回数	3	

最も数が多かった（12件）のは、他大学の参加を求めるものである。5年間分をまとめて行ったので、北陸の大学、信州大学という要望も含まれているが、この要望の中では、公立大学の参加を求めるものが最も多かった。次に多かった（9件）のが、「講演時間が短い」というものと「他地区での開催の要望」である。他地区としては、関西、静岡、

九州がそれぞれ1件ずつで、残り6件は岐阜での開催を望むものであった。

本来の意味で「悪い」というカテゴリーに当てはまるものは、「講演時間が短い」「資料がなかった」「会場が狭い」「願書が配布されない」である。願書が配布されないという不満は、合同説明会に限らず色々な相談会でも言われることである。9月末や10月初めに一般入試の願書がまだできていないと言うことは大学関係者にとっては周知の事実であるが、受験生にとっては不満となることがある。「講演時間を伸ばす」とことと「参加大学数を増やす」ことの両立はかなり困難である。不満の中で、「資料がない」という点には、十分な数を用意するという対応可能なので、この点には注意する必要がある。

表2の最後の「合格」というカテゴリーは、「名古屋大学に絶対合格するぞ」などのコメントである。全体としては45件であるが、2007～2009では、ほんの数件ずつしかなかった。受験生の気質が変わってきたことを示す良い事例だと思われる。

#### 4 名工大における志願者の分析

受験生が出願校を決めるのは、センター試験の成績に大きく依存している。各受験産業はセンターの自己採点の結果から、合否確率を出すサービスをしており、出願はその結果によって決めていると言える。名工大の場合、地元の河合塾のセンターリサーチ（バンザイシステム）が最も影響が大きい。実際の名工大への出願がどのような状況になっているのかを調べた。センターリサーチに従い、合格可能性80%以上を「濃厚」、50～79%を「ボーダー」、20～49%を「注意」、19%以下を「以下」と4グループに分けて調べた。2009年度前期試験の受験者の状況を図2に、合格者の状況を図3に示す。図2を見ると、受験者は必ずしもセンターリサーチの結果に従って出願しているわけではないことがわか

る。合格者で見ると、ボーダー以上の受験生が75%近くを占めており、予備校の線引きがかなり適切であることは確認できる。

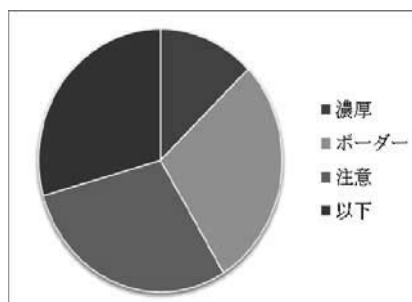


図2 全受験者

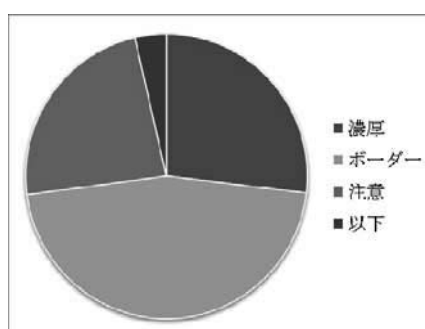


図3 合格者

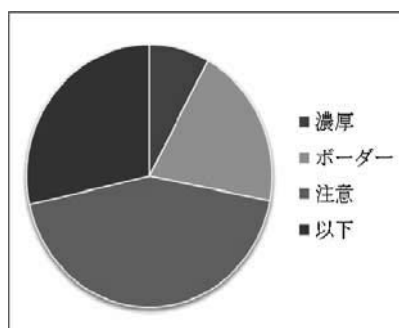


図4 受験者(生命・物質)

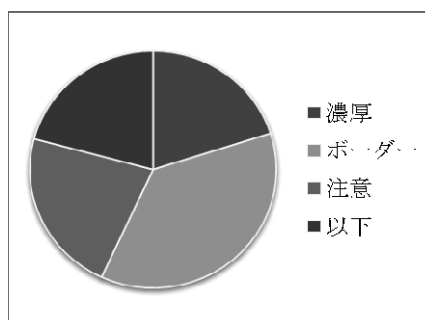


図5 受験者(機械)

学科別に見てみると、全体とは違った傾向

をもつところがある。生命・物質工学科の結果を図4に、機械工学科の結果を図5に示す。生命・物質工学科では72%の受験者が合格可能性50%以下である。機械では合格可能性50%以下の受験者は43%しかいない。この違いは、名古屋大学との個別ランクの差によって生まれている。生命・物質工学科と化学生物（名大）では個別ランクは2.5しか変わらないのに対して、機械と機械航空（名大）では7.5も差がある。生命・物質工学科の場合、前期は無理をしてでも名大にチャレンジするという受験生が多くなり、機械工学科の場合は、さすがにランクが違いすぎるので名大には出願しない受験生が多いのであろう。一方、濃厚なラインを超えているものが生命・物質工学科で8%、機械工学科でも5%受験している。この受験生たちのほとんどは名古屋大学のボーダーよりも上である。都合の良い解釈かもしれないが、説明会などで学科の特色を伝えてきたので、センターの成績だけに左右されることなく、出願してきたのであろう。そして、合同説明会を通して各大学を比較できるからこそ、大学の中味を見た選択が行われたのではないかと考えている。

## 5 静岡大学の状況

### 5.1 「国立」「地元」志向の中で

2010年度入試では、景気の低迷を受けて、学費や生活費の面から「国公立大志向」「地元志向」が強まったと報じられている。

実際、国公立大学の一般入試の志願状況（出願最終日の2月3日15時現在）をみると、全大学合計で前期日程は約1万2千人、後期日程は4千人弱、中期日程は約800人と全ての日程で前年より志願者が増加している。こうした「国公立・地元」という傾向は、地域差も当然あろうし、大学の規模や設置学部、選抜制度の変更などを考慮せずに、一括りで論じることには無理があるが、ここでは国立12大学の一例として、静岡大学の2010年度一般入試の出願状況を概括する。

### 5.2 地元の増加も周辺からの流入減で相殺

静岡大学の志願者の（高校所在地）県別占有率の状況をみると、昨年度に比べて東海4県（静岡・愛知・岐阜・三重）では、前・後期、全体（全入試）ともに、0.3ポイント程度のわずかな上下しか見せていない。しかし、地元・静岡県についてみると、前期は

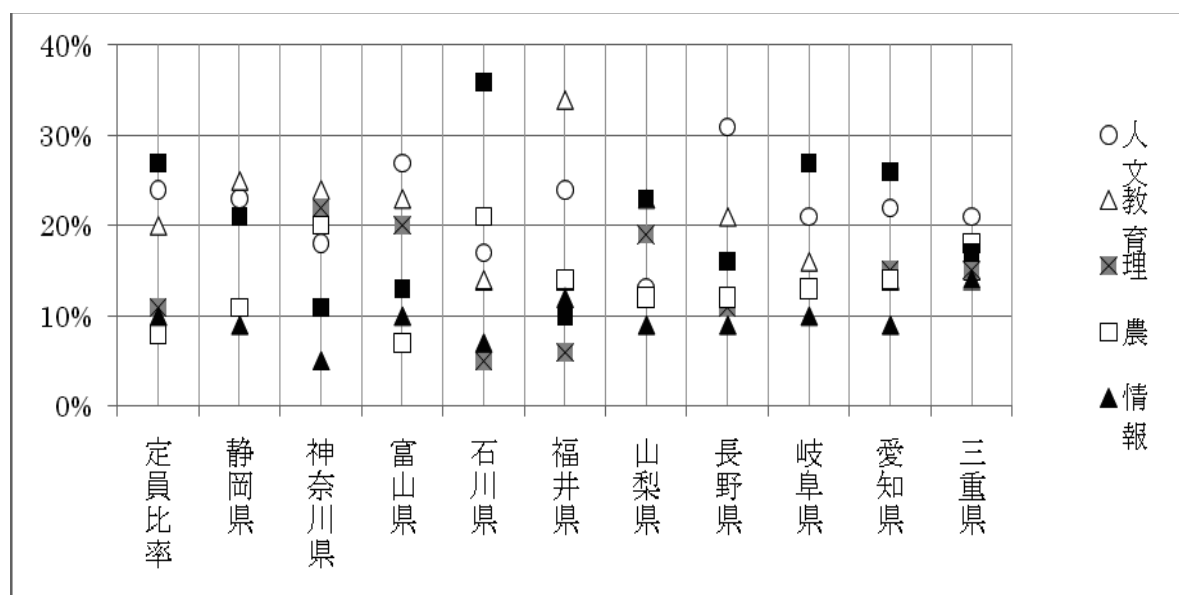


図6 静岡県および周辺県における学部別資料請求の割合

1.2，後期は1.8，全体で1ポイントと、いずれも前年より上昇しており「地元志向」は強まったものとみることができる。逆に、例年、地元に残り占有率の高い愛知県の占有率は前期1.3，後期2.5，全体では1.8ポイント前年より下がっている。静岡県に比べ、受験生数の多い愛知県の占有率がダウンしたことで、地元・静岡での伸びも吸収され、結果として前年比101%の志願者数にとどまったものと見ることができる。

### 5.3 周辺県で異なる情報ニーズ

現在の国立大学の入試制度では、積極的な広報活動を1大学で展開しても、それが志願者増に直ちに結びつくとは言えない。しかし、地元中心の広報活動を12大学での取組のように、周辺エリアに拡大して俯瞰してみると新たな広報戦略が見えてくる。

静岡大学では大学案内や学部案内、出願書類など高校生や受験生からの資料請求の約6割をテレメール（全国学校案内資料管理事務センター）に委託して配付している。2010年度は1年間に延べ17,300人が約23,000件の各種資料をテレメールを介して請求してきている。人数、件数ともに高3生・高卒生を合わせると、全体の8割以上になる。図6は、地元静岡を含め、隣接県、東海・北陸の各県別に、6学部の請求比率をみたものである。図中「定員比率」は全学定員（1,980）に占める各学部の学部定員の割合である。

静岡県では定員比率と比べると教育学部の資料請求率が高く、工学部が低くなっている。逆に、静岡大学への志願者が多い愛知県の場合は、教育学部の請求率が低くなっている。愛知県では理学部や農学部の請求率が定員比率と比べると高い。全国的に少ない両学部が名大に設置されており、後期入試を実施していないことも影響していると思われる。

22年度入試で「地元志向」が強まったこと、請求する学部案内の比率が県によって大

きく異なることもわかった。国立大学といっても設置学部・学科や周辺の私学との関係など各県で入試環境は大きく異なる。国立12大学が合同で積極的な広報活動を展開することで、各大学の差異、特徴がエリア全体でより明らかになろう。学部不適合など接続の問題も少しずつ解決できるものと期待される。これからは、地元に対する適切な情報提供と合わせて、各県のニーズと周辺国立大学との関係を意識した広報活動が必要になろう。

### 6 国立12大学ホームページ

各県のニーズと周辺国立大学の関係を意識した広報の新たな手段として、2010年5月から国立12大学のホームページの運用を開始した。<http://www.daigaku-jp.org/12daigaku/>

現在では「国立12大学」で検索すると、Google、Yahoo共にトップに表示されるようになった。PPVは月平均3200である。このホームページの特色は、合同説明会の基調講演「理系のための学科選び」をベースとして、学びの内容をわかりやすく伝えることを中心としている点である。ホームページ全体の内容を簡単にまとめると以下の6項目になる。

- 1) 学科選び
- 2) 国立12大学イベント情報
- 3) オープンキャンパス情報
- 4) 各大学へのリンク
- 5) 各大学のアクセスマップ
- 6) F A Q

学科選びは、医学（薬学）、理学、農学、文系学部、教育、工学系に分類し、工学系は物理、化学、生物、情報、都市・建築に細分している。

6月から8月の3ヶ月間のアクセス解析の結果を検討した。まず、表4に訪問者の滞在時間を示す。0～30秒がかなり多いが、ロボットスパイダーがここに含まれるためである。滞在時間が30分以上の訪問者が150名近くいることが1つの特色である。

表4 滞在時間

滞在時間	訪問回数
0～30秒	1621
30秒～2分	352
2分～5分	189
5分～15分	206
15分～30分	81
30分～1時間	96
1時間以上	49

数は少ないものの、かなり丁寧に情報収集していることがわかり、このホームページが情報提供のツールとして効果があることを示している。表5に、項目別アクセス数を示す。

表5 ページ別アクセス数

ページ	アクセス数
学科選び(トップ)	1014
イベント	1150
オープンキャンパス	1170
リンク	218
マップ1	192
マップ2	103
FAQ	450

学科選びやイベント情報のアクセス数が多いことは当然であるが、オープンキャンパスの日程をまとめただけの、「オープンキャンパス」のアクセス数が最も多くなっている。オープンキャンパスの日程が一目でわかるということは大切な情報であることが確認できる。マップに関しては、東海地区(マップ1)と北陸・信州地区(マップ2)に分けているが、訪問者のアドレス情報から見ると東海地区がかなりの割合を占めているにも関わらずマップ2のアクセスが多い。東海地区の国立志向の広がりや表れと考えている。図7に学科選びのページのアクセス数の内訳を示す。

す。3ヶ月間の総アクセス数は1877であった。

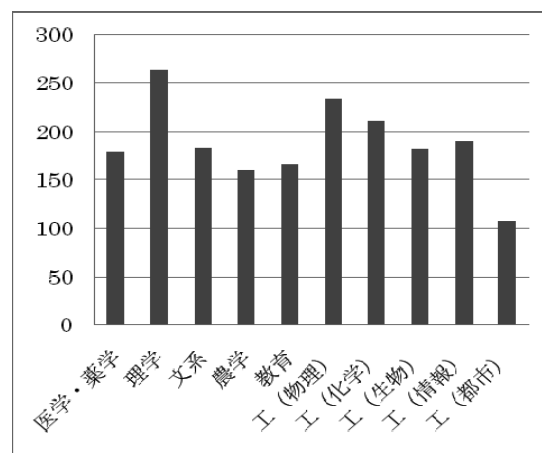


図7 学科選びのアクセス状況

タイトルが「理系のための学科選び」のせい、文系と教育が少なくなっている。工学系の内容紹介が中心なので、工学系が全体の半分近くを占めている。工学部の基幹である機械・電気電子を中心とした工学(物理)がそれほど多くないことは意外であった。工学系の中で、生物系が多いのも特色である。女子の進学率の高さが生物系の学科への興味を高めているのであろう。

## 7 まとめ

合同説明会のアンケートや静岡大学の状況から、各地域に応じた情報提供をするためには各大学単独での広報活動だけではなく、エリアとして協同した広報活動が有効であることが示された。また、名工大の出願状況から読み取れるように、必ずしも輪切りの状態で出願する訳ではないので、各分野の学びの内容をわかりやすく伝えた上で、各大学の違いを示していくことも重要なポイントである。自宅にいながら情報をすぐに入手できるという意味で、これからweb広報がますます重要になるであろう。アクセス解析を積極的に利用する必要もある。国立12大学の試みが、入試広報への参考となれば幸いである。